はじまりの卵の物語

坂東真砂子

大沢幸子 絵

理論社

地平線ブックス
はじまりの卵の物語

NDC913
B6判 19cm 272p
1989年12月初版
ISBN4-652-01628-X

坂東真砂子（ばんどう・まさこ）
1958年高知県に生まれる。
奈良女子大学卒業後、イタリアのミラノ工科大学、ブレラ美術学院に2年間留学。第7回毎日童話新人賞優秀賞受賞。寺村輝夫氏主宰の童話雑誌〈のん〉（1982～87）に童話を発表。作品に紀行文「ミラノの風とシニョリーナ」（あかね書房）、童話「クリーニング屋のお月さま」（理論社）がある。東京在住。

著者　坂東真砂子
画家　大沢幸子
発行　株式会社 理論社
発行者　鈴木良司
〒162 東京都新宿区若松町15-6
電話 営業 (03)203-5791
出版 (03)203-5794

1989年12月第1刷発行

©1989 Masako Bando, Sachiko Osawa Printed in Japan.
落丁・乱丁本はお取り替えいたします

はじまりの卵の物語

坂東真砂子

大沢幸子 絵

理論社

論社　定価1300円(本体1262円)

652-01628-X C8393 P1300E

地平線ブックス

はじまりの卵の物語

坂東真砂子

大沢幸子 絵

理論社

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

はじまりの卵の物語……もくじ

『ハジメの書』 10
第1章 智院 19
第2章 空地 43
第3章 羽根館 68
第4章 卵石 87
第5章 金森 106
第6章 歌原 128

第7章　夜雲町（やくもちょう）　143
第8章　院長　164
第9章　地下牢（ろう）　193
第10章　宝卵城（ほうらんじょう）　217
第11章　結花　240
卵の空のむこう　263

装幀　平野甲賀

はじめに卵あり

石をもち
卵よりあらわれしもの
その名はハジメ
すべてのものの母なりき

ハジメが石をふるうたび
世界は誕生をくりかえす
死と誕生のはざまより
世界はふたつにわかたれり

わかれた世界をつなぐ場所
それはハジメのねむる家
はじまりのときよりつづく
空とぶものの翼のある家

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

『ハジメの書』

結花は、ふーっとため息をついて、本を閉じた。頭がぼーっとしている。目をぱちぱちとさせて、あたりを見まわした。水色のカーテン、シールをべたべたはった机。たんすには、ぬいぐるみのスヌーピー。見慣れた自分の部屋だった。

結花は、ベッドの上でほおづえをついて、『ハジメの書』という本の題名をじっとながめた。それは、学校の図書館で借りた、古い本だった。

「翼のある家か。ほんとに、そんな家があったらな。あーあ、あたしも、ちがう世界に行ってみたいな」

どこかにあるかもしれない別の世界。見たこともないような生きものがすんでいて、不思議なことばかり起こる世界。行ったら悪者なんかばんばんやっつけてやるんだ……。

ピーンポーン。玄関のチャイムが鳴った。だれか来たらしい。すぐに、お母さんの声がした。

「結花、かなちゃんよ」

「あ、はーい」

結花は、ベッドから起き上がると、本を置いて立ち上がった。

部屋をでると廊下。つきあたりが玄関になっている。ドアを開けると、団地の廊下に、

かな子がぽつんと立っていた。結花の顔を見たとたん、かな子は機関銃のようにしゃべりだした。

「大変よ、結花ちゃん。あたし、朝ごはんを食べてテレビを見てたの。そしたら、ママが勉強しなさいっていうの。いやだっていったら、塾にでも行けって。三学期の成績のことだの、そろそろ、受験準備しなきゃいけないだの、うるさいったらないのよ。あたし、頭にきて……」

スピーカーかな子のおしゃべりを最初から聞くと、かんじんのところにつくまでに日が暮れてしまう。結花は、話をさえぎって、

「なにが大変なのか、先にいってよ」

かな子は、そら豆をのみこんだような顔になった。

「つ、つまりね、デカブーとチビヒロが、あたしたちの秘密の家を占領しているのよ」

「ええっ」

結花は、あわてて、つっかけを運動ぐつにはきかえた。

「取りかえさなきゃ」

「そうよ、そうよ」

結花は、そのままでようとして、

「いけない。自転車の鍵」

また家にあがって、台所にとびこんだ。台所では、お母さんがアイロンをかけながら、テレビを見ていた。結花は、食器棚の上をかきまわして、さけんだ。

「お母さん、自転車の鍵！」
「自転車なら、美花が塾に乗ってったよ」
「ええっ、また、お姉ちゃん？　あたし、ちっとも使えないじゃない」
「だって、塾は毎日あるんだから、しょうがないでしょ」
「春休みに、毎日塾に行くなんて、ばかみたい」
お母さんが結花をにらんだ。
「おまえも、ちょっとは美花を見習ってもらいたいものよ」
「あたしはお姉ちゃんとちがうもん」
結花は、お母さんの返事がかえってくる前に台所をとびだした。
かな子は、玄関でいらいらしながら待っていた。
「早く、結花ちゃん」
「自転車は使えないのよ」
「じゃあ、あたしの自転車にふたり乗りしていこう」
「うん」
結花とかな子は、外にでた。かな子は自転車を、いつものように団地の入口に置いていた。
「結花ちゃん、前に乗って。あたし、こわいから」
かな子がいった。結花だって、ふたり乗りはあんまりしたことがない。こわいにはこわいけど、急いでいる。

「転んだって、知らないよ」
かな子を乗せて、自転車をこぎだした。ぐらーり。ハンドルがゆれた。
「きゃーっ。ちゃんと前見てよっ」
かな子がさけぶ。自分じゃ、こがないくせに。いい気なもんだ。むっとしたけれど、いいかえす余裕もない。じっとり汗ばむ手のひら。結花は、真剣な顔でハンドルをもちなおした。
団地の前の桜並木をふらふらと進んでいく。ごつごつしたおじいさんの手のような木の枝には、桃色のつぼみがふくらんでいる。同じ棟に住んでいるおばさんが、ふたり乗りの結花たちをまゆをひそめて見送った。
そのうち、自転車がふらつかなくなった。なんだ、簡単だ。結花は、思いっきりペダルをふみだした。
秘密の家は、結花の住んでいる金森団地から赤光川のほうに自転車で五分ほどのところにある。似たような外観の二階建住宅が、肩をならべるようにして建っている道を進んでいくと、くずれかけた赤レンガのへいがある。そこだけ、時間が早くたってしまったような色あせたレンガだ。そのなかに空地があった。草ぼうぼうの四角い土地に、クヌギやマツの木がぽつぽつと生えている。
この春休み、結花とかな子は、藤のからみついたマツの木の上に、つるをよせ集め、編みこんで、小さなハンモックのようなものを作っていた。これが秘密の家だった。
今、空地の前には、黒と赤の二台の自転車がとまっていた。デカブーとチビヒロの自

転車だ。結花とかな子は、レンガがくずれて、へいの低くなったところから空地にはいっていった。
かな子が、マツの木を指さした。
「ほら、あそこ」
木の上に、デカブーとチビヒロがいた。藤づるのハンモックに寝転がって、ラジオを聞いている。雑草のじゅうたんの上を今はやりの歌が流れていた。
結花は、木の下に歩いていった。
「デカブー、チビヒロッ。そこは、あたしたちの家よ。おりなさいよっ」
デカブーが大きな体をのそっと動かした。
「なんだ、おまえらか。ここはもう、おれたちの隠れ家だぞ」
「そこは、あたしたちが作ったのよっ」
「うるさいっ」
なにかが木の上からふってきた。ぱさ。足元に落ちたのは、チョコポッキーの空箱。
デカブーが、チョコレートで黒くなった口をゆがませて笑った。
「おまえたちは、チリ拾いでもしてるんだな。へへへ」
結花は、空箱を拾うと、デカブーに投げつけた。
「そこは、あたしたちのものよ。人のものを取るなんて、どろぼうじゃない」
かな子もうしろでさけんだ。
「そうよ。どろぼう、どろぼうっ」

チビヒロのメガネをかけた顔が、ひょいとのぞいた。
「ぼくらはどろぼうじゃないぞ。第一、この土地はだれのものだい。おまえらこそ、ここに勝手にはいりこんで、土地の持ち主の許しもなく、木の上に家を作ったんだ。これは罪になるんだぞ」
「ごちゃごちゃいってないで、おりてよっ」
結花は、マツの木をゆすった。かな子も急いで、木をゆすりだした。ハンモックが、ばさばさゆれる。デカブーが悲鳴をあげた。
「うわーっ、や、やめろ」
「落ちろ、落ちろ」
ごとん。ラジオが落ちてきた。チビヒロが木にかきついた。
「ぼ、ぼくのラジオがっ」
結花はどなった。
「おりるまで、やめないからねっ」
そのとき、キイイイッ。うしろで大きな音がした。結花もかな子も、びっくりしてふりかえった。
赤レンガのへいに鉄の門がある。おしても、引いても、びくともしなかった。その門が今、開いていた。門のむこうに立っているのは、薄いうぐいす色の作業服を着た、二、三人の男。結花たちを見つけてどなった。
「こらーっ、ここは立入禁止だぞ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook